研究会記録

「大阪の笑いをさぐる」
日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会
会準備委員会＋本特別研究班（共催）
2016 年 9 月 15 日　13:00 ～ 15:00　関西大学千里山キャンパス　第三学舎 A201

大会準備委員会と特別研究班の共催で、大会 2 日目 13 時から 15 時までシンポジウムが開催された。テーマは、「大阪の笑いをさぐる―ぼけとつっこみ―」である。大阪は日本における「笑いの都」として広く知られているが（井上 1991）、これまでの心理学における研究では、「笑いの都」大阪のイメージを裏付ける結果があまり得られてきていない。例えば、ユーモア尺度を用いた牧野（1998）や谷・大坊（2008）などの研究では、種々のユーモア尺度得点を比較しても、関西の学生の方が関東の学生より高いという結果は得られていない。一部、イメージと一致する結果もある（大平 2012）。秋田と大阪の成人男女における笑い頻度についての自己報告式調査では、男性は有意な差がなかったが、女性は大阪の方が笑う頻度が有意に高かった。この結果について、大平は、笑う頻度には会話頻度が影響するのではと述べている。

大阪のおばちゃんがよく笑うというイメージは事実で、その背景にはしゃべりがあるらしい。しかし、しゃべりと笑いはどう結びついているのだろう。これに関連して、作者としてしゃべくり漫才確立を担った秋田実の評伝を書いた富岡多恵子は「わたしは大阪を離れ他国に住んですでに四十年近くになるが、その間いちばんツライと思ったのは大阪語での『じゃれ合い』が日常にきわめて少なくなってしまったことだった。」（鶴見 2000）と書いている。大阪の笑いをとらえるには、大阪における日常会話と漫才の関連に焦点をあてて研究していく必要があるらしい。

以上の問題解明の糸口を探るため、森下伸也氏（関西大学、特別研究分担研究者、日本笑い学会会長）、藤田曜氏（秋田実氏の孫、漫才作家）を話題提供者、野村亮太氏（東京大学）を指定討論者、森田亜矢子氏（関西大学）を司会とし、雨宮をコーディネーターとして討論を行った。

まず、森下氏は「なんでやねん」の三態と題する話題提供を行った。

「思わぬ事態に遭遇したとき、大阪の人間がきまって口にする言葉がある。『なんでやねん』というのがそれである。この『なんでやねん』には、感情という角度から見ると、怒

り、悲嘆、喜悦の三態がある。怒りの『なんでやねん』、悲嘆の『なんでやねん』、喜悦の『なんでやねん』。このうち『悲嘆のなんでやねん』には多くの場合涙が、また『喜悦のなんでやねん』には笑いがともなっている。ひとは同じ事態に怒りもすれば、泣きもすれば、笑いもするわけだ。モンテーニュの言うとおり、『ヘラクレイトスは泣き、デモクリトスは笑った』とすれば、ヘラクレイトスは『悲嘆のなんでやねん』のひと、デモクリトスは『喜悦のなんでやねん』のひとである。人生、思ったようにすいすい進めばよいが、思ったように進まないことが多い、というよりは思ったように進まないことばかりである。そんなとき、『怒りのなんでやねん』や『悲嘆のなんでやねん』ばかりでは心が、そしておそらくは身体ももたない。そこで発明されたのがユーモアである。思いもかけぬ不愉快な事態を楽しく愉快な状況つまり『喜悦のなんでやねん』へと転換する主観的装置、それがユーモアである。」

大阪言葉の「ねん」は、話者とメッセージ、受け手との一方向的でない柔軟な調整を含む、接尾辞として着目されてきた（尾上 1999）。森下氏はこれに「なんでや」という、思うようにならない予想外の現実への認知的評価を結びつけ、「なんでやねん」という大阪言葉に含まれる独自のユーモア感覚を、怒りや悲嘆との関連で、対処方略として位置づけている。討論では、大阪ではやわらげられた怒りとしての「なんでやねん」も多いのではとの指摘もなされた。大阪言葉では、接尾辞「ねん」によって、怒りと悲嘆、ユーモアのカクテルが供されているのかもしれない。

続いて、藤田氏が「おばちゃんの日常の笑い」と題して、実演も交えた話題提供を行った。大阪のおばちゃんの「あるある」に、会場は大いに盛り上がった。「病院の待合室で、常連と思われる二人のおばちゃんのやりとり。『あれ、山田さん今日来てはれへんね、どうしたんやろ？』『今日体調悪い言うてたわ』。思わず『だからこそ病院にこなあかんねやろ！』と心の中で突っ込んでしまった。漫才ネタ作りで欠かせないのがおばちゃんの言動と行動。そんなおばちゃんの日常のやりとりから笑いを『誇張』『繰り返し』『言葉遊び』などに分類しました。」

笑いやユーモアの研究では、ジョークなどの刺激特性がもっぱら注目され、受け手の特性や文脈は軽視されることが多い。しかし、コメディ実作者の O'Shannon（2012）は、受け手の特性と笑いが生ずる文脈とが重要であることを指摘し、笑いの刺激特性のみを探す人を、コメディ探偵とよんで批判している。笑いの現場で仕事をしている藤田氏の場合も、観客の反応を最も重視し、文脈の影響に敏感であることが、話題と話題提供の仕方双方で印象的に示された。笑いの現場での評価では、大阪のおばちゃんは手強いが最も重要なモニターらしい。

野村氏は、藤田氏の話題提供を受け、観客の反応として自身が研究されている「自発的なまばたきの同期研究」（野村・岡田 2014）を紹介した。これは、落語などの話芸を鑑賞している観客のまばたきが同期し、同期の程度は熟達した話者の方が大きいとする研究である。熟達した話者は、観客の注意を上手に誘導し、これがまばたきの同期として示され

る。また、関東と関西の笑いの比較に関して、丹羽空氏による、ヘマの語りをテーマに、関東と関西を比較した研究があることを指摘した。基本的な仮説は、武士文化の影響が大きいだろう関東ではヘマを話すことはより恥の予期と結びつくが、商人文化の影響が大きいだろう関西ではヘマを話すことはよりウケの予期と結びつくだろうとの対比である。丹羽・加藤(2007)では、関東と関西で、微妙な部分での差が発見された。たとえば、自分のヘマを人に話すか否かについて関東と関西の差はなかったが、関西の方がヘマをより具体的に比喩を交えて話す傾向にあった。また、ヘマを話すことに対し恥を予期するか、ウケを予期するかの程度について関東と関西の差はなく、恥を多く予期する人がヘマを話さない傾向も関東と関西で同じだったが、関西においてのみウケ予期の程度がヘマを話す傾向に影響した。さらに、Niwa & Maruno(2009)では、人がヘマを話すことについての評価は関西の方が高く、自己評価の一部とする程度も関西の方が高いことを見いだしている。単純な恥とウケといった対比は成り立たないにしても、ヘマを語ることに関して、関西の人の方が、より積極的な意味づけをしているらしい。

近年の心理学における地域差研究はきわめて低調である。ニスベットらによるアメリカ南部における名誉の文化と暴力の関係に関する研究は、例外的成功にとどまる。丹羽空氏によるヘマの語りに関する地域差研究は、ユーモアの微妙で高次な部分における関西の特徴を明確に示したものとして重要である。ヘマの語りは「ぼけ」に相当するが、「つっこみ」も含めた、「ぼけとつっこみ」のユーモアコミュニケーション、「なんでやねん」といったユーモアを含んだ複合的対処方略、これらの研究を通じて、大阪の笑いの心理学的特徴をより明確にしていくことができるかもしれない。

（雨宮俊彦）

（参考文献）

井上宏(1991)　『大阪の笑い』　関西大学出版部

牧野幸志(1998)　「ユーモア・センス尺度の作成」　『広島大学教育学部紀要（第一部心理学）』(47:37-46)

尾上圭介(1999)　『大阪ことば学』　創元社

鶴見俊輔(2000)　『太夫才蔵伝』　平凡社ライブラリー

丹羽空・加藤和生（2007）　「人とのやりとりにおいて、 関東と関西とでは違いがあるのかー
自分のヘマを他者に話す行動を通しての地域文化差の探索的検討」　『九州大学心理学研究』(8:91-107)

谷忠邦・大坊郁夫(2008)　「ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究」
『対人社会心理学研究』(8:129-137)

大平哲也(2012)　「『笑い』はどうやって測定するの?　笑いの測定法について」　『公衆衛生』(76:407-411)

野村亮太・岡田猛(2014)　「話芸鑑賞時の自発的なまばたきの同期」　『認知科学』(21:226-244)

Niwa, S., & Maruno, S. I.(2009)　"Self-denigrating humor for constructing relationships and regional cultural differences in Japan"　*Journal of Social, Evolutionary and Cultural Psychology*　(3:133-154)

O'Shannon, D.（2012）"What are You Laughing at " *A Comprehensive Guide to the Comedic Event*　Bloomsbury Academ

「なにわ大阪の基層文化研究～笑いを生み出す歴史空間～」
本特別研究班＋日本文化研究会 AI　合同研究会（日本文化研究会 AI 第 26 回例会）
2016 年 11 月 19 日　13:00 ～ 16:30
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

今回は日本文化研究会 AI と合同で、なにわ大阪の笑いを生み出す基層文化についての研究発表を中心に研究会を開催します。なにわ大阪で笑いが栄えるようになる以前の文化をめぐって考察を深めます。

13:00 ～ 13:15　開会のあいさつ　浦和男、鈴鹿千代乃
13:15 ～ 14:15　発表 1　「海辺のをとめたちー遊女の原像ー」　鈴鹿千代乃
14:20 ～ 15:20　発表 2　「難波の河川を去来する神仏」　丸山顕徳
15:25 ～ 16:05　発表 3　「祭礼と笑いーなにわ大阪と大和」　浦和男
16:05 ～ 16:25　質疑応答
16:25　閉会のあいさつ　関屋俊彦（関西大学）

発表 1　鈴鹿千代乃（神戸女子大学名誉教授）

「売笑」という表現があるように、笑いと遊女は根底で結びつくところがあります。「なにわ」に現在のような笑いの文化が生まれる前に、どのような「遊び」の文化があり、どのような層がそれに関わったか、を考えるとき、淀川、大和川流域の「をとめ」たちの存在が浮かび上がります。そのような「海辺のをとめ」たちから遊女が発生する過程についての仮説をお話いただきました。「笑い」を売り物にする遊女化は零落が進んでからであり、彼女たちが本来売り物にした「笑い」はもっと神秘的な、宗教的な力と結びついていたのではないか、おかしさの「笑い」ではない「笑い」についても考える必要があることを痛感する講演でした。いつもの「鈴鹿節」の炸裂、その勢いと内容に参加者は圧倒されました。

発表 2　丸山顕徳（花園大学）

「八百八橋」といわれるなにわ大阪の土地は、もともと海に面し、そこに流れ込む多くの河川がありました。海から来る神仏はまれびと神であり、現世利益をもたらす、また、海に去る神仏は罪や汚れを浄化する力を持つと考えられました。海、河川は霊魂を昇華させる力があると見なされ、現在あるなにわ大阪の社寺の建立に河川を去来する神仏が関わっています。「浪花」は、沖縄では波の山の部分で、神が宿るところとされます。大阪の「なにわ」もまた、そうではないか。日本の宗教と「笑い」はともに「心を浄化させるシステム」を持つことを考えると、大阪には古代から「笑い」を育む土壌があったと考えられます。

発表 3　浦和男（関西大学）

今回の研究は、偶然ですが、「河川」がひとつのキーワードとなりました。秋に南大阪でにぎわう「だんじり」、その地車は大きく 3 タイプに分かれ、石川以東は「俄だんじり」と呼ばれます。せり出した縁上で「にわか」や寸劇を演じるからです。このタイプのだんじりの中心は千早赤阪村の建水分神社です。岸和田、河内長野系だんじりの神社は住吉神社系ですが、建水分神社は大和の廣瀬神社系です。そして、廣瀬神社系の神社では、とくに春の御田祭で多くの滑稽な要素を見せます。大阪平野の杭全神社の御田植祭にも滑稽な要素があり、ここも廣瀬神社系列です。それはなぜか。この解明が今後の課題となります。

（浦和男）

第 27 回能楽フォーラム「この人に聞く－関西大学図書館新収蔵能楽文書をめぐって
能楽学会（主催）　関西大学学文学部、本特別研究班（共催）
神戸女子大学古典芸能研究センター（協力）
2016 年 12 月 24 日　13:00 ～ 17:00　関西学千里山キャンパス　第 1 学舎 1 号館 A301

今年度の能楽フォーラムは関西大学に新たに収蔵された生田本と井狩本を特集します。第 1 弾は生田本の特集で、鼓簡の研究家生田秀昭氏をお招きし、明治初頭にアサヒビールの基礎を築き、大西閑雪に謡を習っていた生田秀、『鼓簡之鑑定』を山崎楽堂とともに著した子息耕一について、お話をうかがいます。また、大西家の現当主である大西智久氏をお招きし、観世清廉より雪号を贈られ関西随一の勢力を誇った大西閑雪に焦点を当て、近代の関西能楽界と大西家について、お話をうかがいます。

第 1 部　「新収蔵生田本」について　関屋俊彦（関西大学）
第 2 部　この人に聞く
①生田秀昭（鼓筒研究家）聞き手：関屋俊彦
②大西智久（観世流シテ方）聞き手：大谷節子（成城大学）
トーク・セッション：生田秀昭、大西智久、大谷節子、関屋俊彦

平成 28 年 12 月 24 日、関西大学千里山キャンパス第一学舎 1 号館 A301 において、第 27 回能楽フォーラムが行われた。能楽フォーラムとは、関西における能楽学会主催の例会である。東京では毎月例会となっているが、関西では当該年度の 12 月と 3 月に実施している。関西大学での開催は平成 24 年度以来である。ここのところ「この人に聞く」という形で、能楽師もしくは、それにかかわる方を招いて話を伺っている。今回は、副題を「関西大学図書館新収蔵能楽文書をめぐって」とし、関大図書館に関屋が中心となって収蔵した生田本（12 月）・井狩本（3 月）をテーマとする。

当日、総合司会は高橋葉子氏（日本伝統音楽研究センター客員研究員）により、天野文雄氏（大阪大学名誉教授）の開会の辞で始まった。

第Ⅰ部　基調報告「新収蔵生田本について」　生田秀は安政3年（1856）に佐渡島で生まれ、のち明治20年に大阪麦酒会社に入社し、ドイツに派遣され、現在のアサヒビールの基礎を築いた功労者であるが、その間の事情を新潟テレビで放映されていたものを一部編集し直したLDをアサヒビール東京本社の横川幸知氏からお借りして上映し導入とした。次に、ここに至る経過をパワーポイント・あらかじめ作成しておいた冊子を用いて行なった。秀は取締役にまでなる経済人であったが、一方で、子息耕一（山崎楽堂と『鼓筒之鑑定』を著す）と共に大阪一の名家・大西閑雪（大正5年76歳没）に観世流謡を習った文化人でもあった。閑雪の弟子名簿が残っていて、それには鴻池財閥総裁新十郎を始めとした財界、学習院長荒木寅三郎を始めとした学会等々当時の大阪人を代表する忽々たる名が列挙されている。秀は明治39年（1906）に急逝するが、今回まさに110年ぶりに閑雪・秀の御子孫の対面が実現したことになる。

第Ⅱ部【この人に聞く①生田秀・耕一について】　今や鼓筒研究家の肩書を持たれる生田秀昭氏に関屋がインタビューした。秀昭氏は、平成16年に競争相手も数多あったにもかかわらず秀・耕一を中心として集められていた蔵書を関大図書館に寄贈してくださった。関大が新制大学になる時、蔵書数が不足していたのを憂えられた金子又兵衛教授が同じ吹田の名家である生田氏に頼んで寄贈された図書が旧生田本で、これに新たに加えられた訳である。ちなみに鼓100余丁は千葉の国立歴史民俗博物館に寄贈されたという。今回、秀昭氏は展示用として耕一がドイツに行った時の珍しいパスポートも持参された。パワーポイントでは、秀・耕一を中心とした写真を次々拝見することが出来た。冊子には「鼓の研究について」の一文も寄せてくださった。なお、今回、明治26年6月、秀が大阪府庁に赴き、新設予定の大阪工業学校に醸造学科を設けるよう説き、同校は今の大阪大学工学部の前身であることも判明した。

【この人に聞く②近代の関西能楽界と大西家】　観世流シテ方・大西智久氏に大谷節子氏（成城大学教授）がインタビューした。まず、大谷氏がパワーポントを使って、大西家は宝暦12年に謡講を中心として発展してきた京観世五軒家の岩井家に学んだ筆頭弟子家で、近代に入り社中200名を超える勢力を誇っていたところから説き起こされた。すなわち、観世流謡の歴史にかかわる古式を残されていることを強調された。次に大阪能楽会館の建設について目付柱を取り外せる斬新な構造で、財界のパトロンに支えられてきたことを話された。

【トーク・セッション】　大西・生田各氏に大谷氏と関屋が付け加えて質問する形で進められた。京都市芸大の御尽力で閑雪〈羽衣〉の音源復元を聞いたことを受け、大西氏が「口下手な代わりとして」とおっしゃりながら、急遽、江崎欽次朗氏と一節を謡ってくださったのは、イヴと重なり参加者は45名ほどであったが、素晴らしいクリスマス・プレゼントであった。指名質問コーナーがあり、大西氏の縁者にあたる手塚稔子氏には第20回で

お話しくださったのだが、それ以来、この会にはまってしまったこと、大西氏が持参してくださった12本の閑雪舞姿の掛け軸を展示したのだが、藤岡道子氏（京都聖母女学院短大名誉教授）からそれを描いた玉手菊洲についての説明があり、横川幸知にはLD提供の御礼、写真家の今駒清則氏には大阪能楽観賞会時代の思い出、鶴崎裕雄氏（帝塚山学院大学名誉教授）からは生田氏の鼓に描かれている仙翁についての質問があった。当日は、本文中に記したもの以外に、関大図書館の準貴重書等を展示し、皆さんの目を楽しませることができた。

閉会の辞は関屋が述べた。懇親会は、世話人と招待客を中心として百周年記念会館「紫紺」で大西氏の乾杯の音頭で始まった。共催の文学部・なにわ大阪研究センター特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」にも感謝申し上げたい。

（関屋俊彦）

「なにわ大阪の『笑い』文化の継承～関西大学落語大学笑述」
本特別研究班主催　2017年2月18日　13:00～17:00
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

関西大学文化会落語大学は1964年に創部、50年を超える長い歴史の中、多くの人材を輩出してきました。同時に、大学生落語という領域の伝統を受け継ぎ、なにわ大阪の「笑い」文化を継承する重要な役割を担ってきました。本研究会では、学園紛争華やかな頃に発行開始された部年報『いっせき』編集の思い出をお聞きし、あわせて部創設当時の話もうかがい、関西大学落語大学の歴史を掘り起こします。

13:00～13:10　開会あいさつ　　浦和男
13:10～13:50　講演「落語大学『いっせき』考～社会の中の学生落語」
　　山田富士雄（夢うつつ）
14:00～16:15　ごいっとうさんインタビュー　「落語大学創世記を語る」
　　鈴木洵（千里家我楽）、山田富士雄、堀登志子（夢つぼみ）
16:30～17:30　落語実演　関大亭学乱（田堀照幸）、千里家圓九（西本文洋）

関西大学文化会落語大学は1964年に創部、50年を越える長い歴史の中多くの人材を輩出してきた。まず、学園紛争華やかな頃に発行開始された部年報「いっせき」編集の思い出、創部10年後頃の落語大学の様子を、創刊号の編集に携わった山田冨士雄氏からお聞きした。大学生落語が単なるアマチュアの芸にとどまらず、真摯な態度で上方芸能に取り組む姿が「落大生（＝部員）」に見られたことを懐かしまれた。また、芸を磨くことが学生生活を楽しくし、人生の曙に立つ関大生としての勉強の一貫にもなったことを強調された。

続いて、鈴木洵氏、山田冨士雄氏、堀登志子氏が登壇、堀氏が両氏に質問をするという形でインタビューを行った。鈴木氏は、桂文枝師匠（本名河村静也、本学中退）と高校時代からの同級生で、文枝師匠の若かりし頃の思い出を楽しく語られた。最初は、女子学生にもてたいという若者らしい気持ちもあったが、だんだんと落語にのめり込む「落大生」たちの中でも、文枝師匠が熱心に芸の研鑽を積む姿がすばらしかった。

最後に、関大亭学乱、千里家圓九の落大 OB による落語の熱演で、参加者 70 数名を唸らせた。本学文化会落語大学は、大学生落語という領域の伝統を受け継ぎ、なにわ大阪の「笑い」文化を継承する重要な役割を担ってきたことが証明された。　　（浦　和男）

第 28 回能楽フォーラム「この人に聞く－関西大学図書館新収蔵能楽文書をめぐって
能楽学会（主催）　関西大学学文学部、本特別研究班（共催）
神戸女子大学古典芸能研究センター（協力）
2017 年 3 月 6 日　13:00 ～ 17:00　関西学千里山キャンパス　第 1 学舎千里ホール A

今年度の能楽フォーラム第２弾として、関西大学に新たに収蔵された井狩本を特集します。井狩本とは、狂言の茂山千五郎家を支えてきた弟子家集団「愛狂社」の中心人物だった井狩辰吉（大正 9 年 72 歳没）が千五郎家の台本を丁寧に書写したものです。本フォーラムでは、辰吉の子孫にあたる井狩尚志氏と、このたび「千作」を襲名なさった、五世茂山千作氏をお招きし、お話を伺います。

また、狂言研究の重鎮、田口和夫氏に東西の狂言の特色についてお話しいただき、トーク・セッションでは、これからの狂言について語り合います。

第１部　基調報告:「東と西の狂言―初世萬・四世千作―」　田口和夫(文教大学名誉教授)
第２部　この人に聞く
①：井狩尚志（能楽愛好家)」　聞き手：関屋俊彦（関西大学）
②：茂山千作（大蔵流狂言方)」　聞き手：関屋俊彦
トーク・セッション：井狩尚志、茂山千作、田口和夫、関屋俊彦

2016 年 12 月の「第 27 回能楽フォーラム」に続き、今回は関西大学に新たに収蔵された「井狩本」についてのフォーラムを開催した。「井狩本」とは、大蔵流狂言の茂山千五郎家を支えてきた弟子集団「愛狂舎」の中心人物であった井狩辰吉（大正 9 年 72 歳没）が千五郎家の台本を丁寧に書写したものである。千五郎家の台本で活字化されたものは極めて少なく、転写本とはいえ、今後、関大の井狩本を土倉本と共に見ることで千五郎家の台本の全貌がわかるという研究上貴重な資料である。

総合司会を藤岡道子氏（京都聖母女学院短大名誉教授）にお願いした。まず、藤田髙夫文学部部長の開会の辞、井狩氏への図書館長名での感謝状贈呈式が行われた。

第Ⅰ部「基調報告」　「東と西の狂言―初世萬・四世千作―附、井狩本改正狂言について」と題し田口和夫氏（文教大学名誉教授）が講演された。配布資料集に掲載された「和泉流改正狂言小考―三宅本・万蔵家本・藤江本紹介・検討―」は、本学文学部『国文学』101号に掲載された論文の一部である。明治3年、大蔵流の有力弟子たちが合議して、流儀に新たに組み入れた31曲（『大蔵家之記』）に基づくものが井狩本にも「新政（改正）」として引き継がれていることを明らかにされ、井狩本の意義を明らかにされた。

武智鉄二演出の〈夕鶴〉以来、茂山千五郎家と野村万蔵家の異流共演が始まった訳だが、自由闊達な四世千作に正統を重んじてきた萬氏が芸域を広めることにもなった〈千鳥〉や〈蝸牛〉の共演の映像を使用して解説された。そして、伝統を墨守するだけではなく、個人の個性が色濃く表れてきた近代の狂言の家のあり方を千五郎正重・五世万造に焦点を当てることで現代の狂言のあり方につながると一石を投じてみせられた。

第Ⅱ部【この人に聞く】　関屋が聞き手となり、まず最初は井狩尚志氏からうかがった。関屋が、元々関大図書館に所蔵されていた土倉徳三郎狂言本の履歴に愛狂舎のなりたちが記されていること、井狩本の意義を説明し、蔵書目録を呈示した。その後、井狩氏へインタビューを行った。御自身は昭和11年生まれで、祖父の影響で幼少の頃から能楽に親しんでいたことに始まり、茂山家とのかかわりでは〈釣狐〉は二世千作以来見ていること、千作氏の初舞台〈しびり〉も見ていることを話された。「能楽愛好家」と自称されるだけあって厖大な鑑賞体験をお持ちである。新たに河村隆司文庫（法政大学能楽研究所）にも「辰吉」の名が見出されたのであるが、今回、河村氏のことも伺えた。絵の師匠としての須田国太郎氏のことにも及んだ。続いて、昨年「千作」を襲名されたばかりの五世茂山千作氏にインタビューした。まず、御持参いただき展示した「御所人形（謡手）」の説明をなされた。千五郎家は、もともと御所御用中心の青造酒介こと久蔵英政に発するもので、あえて展示をお願いした逸品であり、こうした会での展示は珍しいことであろう。途中、参加されていた青敬之氏を御紹介し、まさに196年ぶりの子孫対面となった。その際、どうやら茂山家では不明になっている家紋も、青家の家紋を参考までに紹介した。青家に残る鏡資料は、残念ながら手付かずのままである。その他、昭和51年に皇居で三世千作が家元らと〈素袍落〉を演じた際に賜った皇后盃、安土桃山時代の菊花模様縫箔をスライドで紹介・説明され、昭和29年に小御所が火災で焼失した際残った柱を〈三本柱〉で使った時の興味深い話もお聞きすることができた。ところで、『茂山千作　狂言八十年』（都出版社）は三世千作が著したものだが、現在では稀覯本になっている。その口絵写真には、千作の後シテとアド漁師の井狩辰吉が共演している〈狸腹鼓〉が写っている。また、「一家打揃って」には、千作と息子千五郎・千之丞、孫の七五三（しめ）の写っている写真で、七五三こと現千作氏は懐かしそうに思い出を話された。千五郎・千之丞の名コンビの話もされた。

【トーク・セッション】　関屋が司会を務め、登壇された茂山・井狩・田口各氏に話を聞くという形で進められた。やはり武智鉄二の影響は大きく東西の狂言師に刺激を与えたこ

と、千五郎家の「お豆腐狂言」にあたるものが万蔵家では「末広屋」と呼ばれていたこと、京都の市民狂言会は50年を迎え、弟子家も「三笑会」以来盛んであること、昭和32年から始まった学校狂言のことなど多岐に亘った。中でも、稽古は千五郎家では父からではなく祖父からであったことに対し、田口氏から万蔵家では六世が鏡的存在であることを示された上で、「舞台は何を受け継ぐか」を考えると、結局、人によって変わるのだという、まさに現代の芸談につながる貴重な発言がなされた。

会場からの質問は指名した方にお願いした。味方健氏（観世流能楽師）から〈鞍馬天狗〉や〈国栖〉の間狂言の相違について質問があり、千作氏から台本でも詳しい型付は決めていないとの答えであった。青敬之氏からは、お豆腐狂言のファンクラブの会員であったことが披露された。森下伸也氏（関西大学、日本笑い学会会長）からは常々狂言は大らかな笑いで世界に誇るべき伝統であるとの感想が述べられた。小林健二氏（国文学研究資料館）から三世の稽古のつけ方の質問があり、千作氏からお菓子でつられて、狂言をやれといわれたことはないとの興味深い答えがあった。田中恵美氏（元図書館員）からは井狩氏への改めての御礼が述べられた。最後に千作氏の歌唱指導も含めて付祝言〈猿唄〉を会場の皆さんと合唱出来て盛り上がったことは、有意義な一時となった。最後に天野文雄氏（大阪大学名誉教授）から閉会の辞があり、2回に渡る本学での「能楽フォーラム」を終了した。参加者は56名で、結果的にはいつもと同じような参加者数であったが、お忙しい方も多く、挨拶だけで帰られた方も多かった。興味はあるけれど「能楽」とか「学会」の名がつくと敬遠される方もいたのではなかろうか。共催の文学部、なにわ大阪研究センター特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」班に、また、手伝ってくれた私の最後のゼミ生たちにも感謝申し上げたい。（関屋俊彦）

創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）成果報告会
「なにわ大阪研究のこの一年」
なにわ大阪研究センター主催　2017年3月7日　13:00 ～ 15:50
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

創立130周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）の2016年度研究成果報告会が開催され、本研究班は代表研究者の浦が報告を行った。各研究者の成果を報告するには時間が十分でないため、浦の研究成果の一部を公表した。「大阪は笑いの聖地」とは本当であろうか。ゼミ生は「大阪の笑いといっても、地域によって笑いが違う。海側と内陸では違いがあるし、南北でも違いがある」と指摘する。たしかに、大阪城を中心に十字を描くと、なにわ大阪文化の骨格が見えてくる。北東は淀川沿いに京都方面から、北西は大阪湾や陸路を使って播州、四国から、南東は河内、奈良、近江から、南西は堺、泉州から笑いを含む芸能文化が持ち込まれた。江戸～昭和戦前の笑い文化を比べると、江戸・東京の方が笑いの文

化が発達しており、大坂・大阪の笑いは周辺地域から持ち込まれた笑いの受容の地域であった。周辺地域の芸能村、そして大阪に住み移って来た「外部」の者たちが、大阪の笑いを生みだし、繁栄へと導いた。古くから「笑いの聖地」というわけではないのだ。では、なぜ、大阪で笑いが受容されたのか、大阪人は笑いが好きか、今後他領域との共同研究が不可欠だが、ひとつの鍵は、大坂・大坂の都市構造にあると考えている。

今回、他の特別研究班の研究内容が本研究の進展にも大きく関わることに気が付いた。分担研究者の成果も加え、なにわ大坂の地域研究として笑いに関する調査を今年度も引き続き進めて行く。

（浦　和男）

特別研究班研究会（非公開）
2017 年 6 月 30 日　16:00 ～ 18:00
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センター会議室

16:00 ～ 17:00　報告 1　「視覚表現の修辞法」　雨宮俊彦（社会学部教授）
17:00 ～ 18:00　報告 2
「発見的手法としてのヴィジュアル・ナラティヴ：「かわいい」研究の事例から」
木戸彩恵（文学部准教授）

報告 1　雨宮俊彦

テレビコマーシャル、ポスターの表現方法に現れるユーモアを「修辞法（レトリック）」の観点から分析し、「おもしろさ」の発生あるいは「笑い」の生ずる要因について考察した。動画であるテレビコマーシャルには「くり返し」、「誇張」、「ナンセンス」といった手法が使われ、見る側へのアピールポイントとなり、同時に「笑い」発生の要因ともなる。一方、静止画であるポスターには、このような手法は一般的には少ないが、数年前に文の里商店街が電通に依頼して制作したポスターには、動画的な要素が用いられている。テレビコマーシャル、ポスターに用いられるユーモアには国による差異があり、同一国内で地域差がある。大阪と東京では、どのような差異があり、また見る側が、どこを「おもしろい」と感じ、それがアピールポイントなるのか、今後なにわ大阪の、とくに現代の「笑い」を考える上で、演芸以外の視覚に訴える表現物に注意を向ける必要がある。

報告 2　木戸彩恵

「かわいい」を心理学の立場で分析する手法として「ビジュアル・リサーチ・メソッド」があるが、視覚に訴える異種の媒体を結びつけることで新しい発想が生まれる。心情的な、言葉にならないものを、さまざまな事象と結びつけることで言語表現として表出させ、それを分析することで、各自の経験を読み解くことができる。ビジュアルなものを、いかに

ナラティブ＝語られた表現とするか、についての分析手法を解説し、今後なにわ大阪の「笑い」研究での活用の仕方を検討した。

今回の研究会では、①心理学研究の立場に限定されたが、「笑い」の分析方法に新しい視点を持ち込む可能性が論じられた、②従来は演芸を演じ手についての「芸評」で「笑い」を論ずる傾向にあったが、コマーシャルという動画、ポスターという画像に「笑い」のあり方をさぐる可能性が論じられた、という点で、今後のなにわ大阪の「笑い」研究の方法、対象について新しい視点が投じられた。コマーシャルもポスターも、東西比較が可能であり、ポスターは戦前のポスターとの比較も可能である。商店の看板、店先の案内などの掲示物、ちらしなどほぼ未開発の領域に「笑い」を探る可能性があることが明らかとなった。

（浦和男）

「『笑い』の東西～笑都大阪の『笑い』を考える」
本学特別研究班主催　2017 年 7 月 29 日　13:00 ～ 17:30
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

なにわ大阪の「笑い」は、東の「笑い」とどのように違うのでしょうか。また、なにわ大阪の「笑い」を海外から見ると、どのような特質が明らかになるでしょうか。今回は、国内学の比較研究を通じて、笑都なにわ大阪の「笑い」を考えます。

講師の Till Weingaertner 博士は 10 年前に関西大学大学院留学中に落語家の月亭方気氏（本学校友）と漫才コンビを組んで芸人としても大活躍。その後、ドイツのベルリン大学で現代上方漫才の研究により修士号、博士号を取得されました。現在、アイルランドのコール大学で日本語日本文化の講師として日本語教育にも携わっています。

日高水穂教授は、方言学研究の立場から、関東と関西の漫才の比較研究に取り組まれています。

13:00 ～ 13:05　開会のあいさつ　浦和男（関西大学なにわ大阪研究センター）
13:05 ～ 14:35　報告 1「落語の国際化」
　　Dr. Till Weingaertner（ティル・ワインガートナー）
　　（University College Cork, Ireland）
14:40 ～ 16:10　報告 2「漫才の掛け合いと日常会話の東西差」
　　日高水穂（関西大学文学部教授）
16:10 ～ 17:00　質疑応答（司会　浦和男）

報告 1　Till Weingaertner

Till 先生はベルリン自由大学で日本語を学ばれ、東京大学文学部、本学社会学研究科に留学された。その後、ベルリン自由大学で漫才の分析による研究で博士号を取得され、現

在はアイルランドのコーク大学で日本学の専任教員として活躍中である。

前半は、日本人による英語落語、その他の外国語落語による海外での落語会の様子、日本語を母語としない人たちの日本での落語家としての活躍の様子を流暢な日本語で紹介された。日本の古典芸能である落語が、国境と文化圏を越えて着実に国際化している事実に、参加者から驚きの声があがった。

後半は、落語が国際化している理由を、人気漫画でありアニメである、雲田はるこ『昭和元禄落語心中』の登場人物の考察を通して、流暢な日本語で、おもしろく、わかりやすく話を進められた。一人は、繊細で厳しく、いわば型にはまった落語を演じる。一方、もう一人は、自由奔放でまさに型にはまらない落語を演じる。これは、江戸落語と上方落語の差でもあり、英語落語が上方の噺し手から始まり、日本語を母語としない人たちも上方で落語に取り組む傾向がある。今日の上方落語の自由さが、落語の国際化に貢献しているのではないかという指摘は、大阪の笑いの質を考える上でも刺戟的である。

報告２　日高水穂

日高先生は日本語学の研究者で、方言学を専門となされている。報告要旨を本号にご寄稿願ったので、ぜひご一読をお願いしたい。漫才のテキスト分析と東西の学生の電話会話の実例から、「なぜ漫才は西で、落語は東か」、「笑いの東西差とは何か」という疑問に、参加者は納得できる答を得られたようであった。

その後、浦を司会とし、３人で質疑応答を中心とするフリートークを行った。笑いの世界的な東西差、国内の東西差についての質問から、報告者のお気に入りの漫才師に関する質問まで、さまざまな質問が投げかけられ、お二人の先生方が困惑する場面もあった。約 70 名の参加者たちは暑さを忘れて、熱心に壇上とフロアのやりとりに耳を傾けた。

（浦　和男）

「なにわ大阪の演芸放送と笑い」
本特別研究班＋追手門学院大学笑学研究所　合同研究会
2017 年 10 月 7 日　13:00 ～ 17:00
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

今回は、追手門学院大学笑学研究所と合同で、戦後在阪放送局の演芸放送と笑いについての研究会を開催いたします。なにわ大阪の笑いの発展には、戦前の NHK、戦後のラジオ、テレビ曲の演芸番組が大きく影響しています。戦後から昭和 30 年代の笑い娯楽番組の黄金期を経て、なにわ大阪の笑いは全国的な笑いへと進化します。東京には見られない、なにわ大阪らしい笑いの放送について考察します。

13:00 ～ 13:05　開会のあいさつ　浦和男（関西大学なにわ大阪研究センター）

13:05 ～ 14:05　報告１　「テレビのエゴ！　演芸を映像にすることとは？」

高垣伸博（追手門学院大学教授、同笑学研究所所長、元毎日放送プロデューサー）

14:15 ～ 15:15　報告２　「テレビ番組ディレクターが現場から見た当世お笑い事情

～演芸をテレビにする限りなき挑戦～」

村田元（毎日放送　報道局チーフ・プロデューサー）

15:20 ～ 16:00　「戦後～昭和 30 年代のなにわ大阪の演芸放送」

（「公益信託高橋信三記念放送文化振興基金」研究助成中間報告１）

浦和男（人間健康学部准教授）

16:15 ～ 17:00　質疑応答（司会　浦和男）

報告１　高垣伸博

「演芸放送」と「放送演芸」とは、どう違うか。放送の成長は「エゴ」を生みだし、「笑い」の質を変えることになる。テレビ放送は昭和 34（1959）年頃から相次いだ。当初は、芸能を見せる演芸の番組であり、テレビは芸能側の姿を伝える役割をしていた点で「演芸放送」と呼ぶことができる。ところが、放送の成長とともに放送局の「エゴ」が表面に現れ、芸能はテレビ局の指示に従って、テレビの規制の枠の中で演じられることなる。放送局によって演芸が作られることになり、「放送演芸」となった。

本来は生で観るべきもの。それが、テレビカメラで切り取られ、観る側は選択肢の制限を迫られ、放送時間の制約で、演者はネタを制限される。演者の個性も、編集のマジックにより放送側が作り出す。今度は演出できない演芸をどう見せるか、という作り手のジレンマが生まれる。「放送演芸」は芸を生かすのか殺すのか？芸の側も、生の芸をどれだけ提供できるかが問われる。

報告２　村田元

現役の毎日放送プロデューサーからテレビ制作現場の裏話を多数お聴きするという絶好の機会となった。

村田氏は、これまで「上方漫才まつり」、「オールザッツ漫才」、「よせもん」などの制作に関わり、「ちちんぷいぷい」の総合プロデューサーでもある。番組制作の裏話とともに、テレビと劇場では何の差があるのか、テレビと YouTube では何の差があるのか、などの疑問と対峙したことを話された。テレビ画面であっても、劇場と同じ本物感が伝わる工夫、寄席の空気が伝わるような、テレビのおきて破りの演出など、毎日放送ならでは工夫が番組の随所にある。ネット配信も進み、テレビ離れが囁かれる今日、テレビが大阪の笑いをいかにリアルに伝えられるか、ひとつの課題であろう。

報告３　浦和男

本学図書館には島ひろし、長沖一旧蔵の演芸番組台本を約 450 冊所蔵する。今回は、毎日放送関係の台本の調査結果を報告した

その後、浦を司会とし、3 人で質疑応答を中心とするフリートークを行った。参加者は 15 名程度と少数であったが、オフレコ話が引き続き多数飛び出し、現代の大阪の「笑い」とは何かを、登壇者とフロアでともに考えることとなった。

（浦　和男）

Japanese sense of humor - Literature, advertisement, and warai festival
本学特別研究班主催　2017 年 11 月 24 日　16:20 ～ 17:50
関西大学千里山キャンパス　第 3 学舎 C505

日本の笑いはユニークだと言われています。CM におけるユーモアセンスのユニークさは、海外のネットでは定番のトピックです。また、日本独自の笑い祭りも、海外の一部の専門家の間ではようやく興味をもたれるようになってきました。

今回のセミナーでは、カンザス大学の Elaine Gerbert 先生をお招きして、日本のユーモアセンスについて、アメリカ人の視点から、語っていただきます。

Elaine 先生は、日本文学が専門で、宇野浩二、江戸川乱歩などの翻訳や日本の笑い祭りに関する論文があり、CM に関する研究もされています。講演は英語でなされますが、要点について日本語の通訳がなされます。講演の後、日本のユーモアセンスについてディスカッションを行います。

16:20　　あいさつ　浦　和男（関西大学なにわ大阪研究センター
16:20 ～ 17:50　「Japanese sense of humor
～ Literature, advertisement, and warai festival」
Dr.Elaine Gerbert　（エレーヌ・ジェルベル）（Kansas University）

Elaine Gerbert 博士はカンザス大学で日本文化を教えていらっしゃる。短期間大阪に滞在されるということで講演をお願いした。当日は原稿を読み上げながらの講演で、司会の浦がパラグラフごとに通訳し、適宜コメントを添えながら進行した。講演原稿は、本特別研究班ニューズレター 8 号に全文掲載させていただいた。先生は、宇野浩二や江戸川乱歩の英語訳を出版され、また諏訪の御柱祭の研究など、日本人でもあまり目を向けない部分に視点を置いて日本研究に取り組んでいらっしゃる。近年は、日本の「笑い」の関わる民俗行事にも目を向け、講演後は山口県防府市で開催される「笑い講」の調査にも出かけられた。

講演では、ご自身と日本文学との関わりについて、日米のコマーシャルのユーモアの違いについて、そして、日本の笑いの祭について、の3点をお話しいただい。日本文学については、社会、文化の知識がなければ作品内容やユーモアの理解が難しい場合が多いことを指摘された。コマーシャルもそうだが、とくにアメリカの場合は、他民族文化のため、明解なユーモアでなければ受け入れられない一方、日本のものは文化的知識の文脈の中で理解されるユーモアであるため、明解なユーモアではない。ユーモアを理解し楽しむためには、文化的な文脈に通じている必要がある。日本の祭では性的な要素が笑いの対象となる場合があり、これはキリスト教社会では考えられないユーモアである。

最後に、笑うことは誰にでもできることであり、もっと笑うことで、富や力の所有による裕福ではなく、富や力を所有しない裕福感が味わえることを、私たちも、国も知るべきである点を指摘された。（浦　和男）

「魅力再発見！　空堀にぎわい　いま　むかし」
本特別研究班＋関西大学社会的信頼システム創成センター（STEP）　共催
空堀商店街振興組合、空堀商店街協同組合　後援
2017年12月13、14日　11:00～16:00　大大阪芸術劇場（大阪市中央区6-17-11）

今回は千里山キャンパスを飛び出し、空堀商店街の「大大阪芸術劇場」に会場を移します。デジタル化した大正3年（102年前）の大阪の古地図をご覧いただきながら、思い出、風景の記憶を自由にお話しいただき、意見交換していただくイベントです。地図をみながら、皆様のお話を聞かせていただくことを楽しみにしています。

大正3（1914）年に霧山吉三郎が制作した「大阪市及附近実地踏測営業者紹介地図」の高精度デジタル化地図を見ながら、空堀や大阪にまつわる思い出、記憶を参加者に自由に語っていただくというイベントを2日間に渡って開催した。94歳の男性からは当時の店舗の位置を詳細に教えていただき、90歳の女性からは大阪大空襲の際に川に飛び込んで九死に一生を得た貴重な体験をお聞きした。また、終戦前後の大変な時期にも、いつも笑い声が聞かれたという話もうかがうことができた。1枚の地図から、記録としては正史に残されていない貴重な思い出や記憶を多数引き出していただくことができた。その後、このイベントで知り合った方同士の町内付き合いが始まったという話や、思い出を語ることでさらに記憶が蘇ってきたという話をお聞きすることができた。（浦　和男）

創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪）研究成果報告会
本特別研究班主催　2018 年 2 月 20 日　13:00 ～ 16:30
関西大学千里山キャンパス　なにわ大阪研究センターセミナー室

関西大学なにわ大阪研究センター特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」が、まもなく 2 年間の期間を終えます。今回は 2 部構成の公開研究を開催します。

第 1 部は、特別研究の成果報告会です。

第 2 部は「秋田実没後 40 年」と題して、秋田実氏に関する研究発表と講演を行います。秋田実氏は 1905（明治 38）年生まれ、1977（昭和 52）年に逝去されました。2017 年は没後 40 年に当たります。秋田氏の 2 日前には稲垣足穂（作家）が、同年には、田中絹代（女優）、延原謙（シャーロック・ホームズの翻訳家）、海音寺潮五郎（作家）、内藤濯（「星の王子さま」の訳者）、そしてチャップリンがともに他界しています。なにわ大阪の現代の「笑い」を考える上で、秋田実氏は重要な人物ですが、まだまだ謎に包まれた部分が多数あります。研究発表と講演を通して、秋田実氏の姿に迫ります。

第 1 部　創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪）研究成果報告会
13:00 ～ 13:50　「特別研究『なにわ大阪の「笑い」に関する調査と研究』をまとめて、
改めて知ったいろいろ」
浦　和男（関西大学なにわ大阪研究センター）

第 2 部　公開研究会「秋田実没後 40 年」
14:00 ～ 15:00　研究発表　「漫才作者という生き方――秋田実の新人会体験」
後藤美緒（日本大学文理学部助手）
15:00 ～ 15:15　質疑応答
15:30 ～ 16:30　講演　「『秋田實　笑いの変遷』をまとめて、
改めて知ったいろいろ」
藤田富美恵（作家）

今年度は研究成果報告会を単独で開催することになった。2017 年は、「漫才の父」秋田実氏の没後 40 年に当たる。なにわ大阪の「笑い」の研究にとって外すことができない人物であるため、本特別研究の最後の公開研究会を第 2 部として、秋田実特集を企画した。研究発表では、若手でありながら、社会思想史とメディア研究の立場から秋田実の研究を続けている日本大学の後藤美緒助手が、東京帝国大学時代の秋田氏に焦点を当て、左翼活動から「笑い」の活動家へのターニングポイントを読み解く試みを発表した。最後に、秋田実氏のご長女、藤田富美恵氏に講演をお願いした。今後、秋田実氏に再度光を当て、なにわ大阪の「笑い」だけではなく、「漫才」の在り方を考える必要を感じる研究会となった。

（浦　和男）